

フリーア美術館所蔵「地藏菩薩靈驗記」第一話の主題

——女性の罪業としての嫉妬と諍い——

山本 聡 美

はじめに

フリーア美術館所蔵「地藏菩薩靈驗記」⁽¹⁾は、十三世紀後半に制作されたとみられ、地藏菩薩の靈驗を主題とする絵巻作例としては、妙義神社本に並ぶ古例として注目される。明治四十年（一九〇七）に米国へ渡り、Charles Lang Freer（一八五四～一九一九）の所蔵となった。縦三〇・五cm、全長一四三・九cmの紙本着色絵巻で、詞書の欠失や錯簡が見られるものの、現状は六つの靈驗譚で構成されている。本作の研究は、一九三一年の秋山光夫⁽²⁾による作品解説から始まった。続く一九三八年には、詳細な作品調査を行った矢代幸雄⁽³⁾が詞書と画面内容について報告を行うと同時に、同絵巻に附属してフリーア美術館に所蔵されていた「探幽縮図」を紹介した。なお、京都国立博物館「探幽縮図」にも、寛文十一年（一六七二）書写の同絵巻縮図が含まれており、こちらについては後に梅津次郎が紹介して

いる。⁽⁴⁾また、東京国立博物館には、フリーア本第六話に該当する江戸時代の模本（「地藏仏感応縁起」第四段「地藏農夫にかはりて疵をかうふりたる事」⁽⁵⁾）もあり、江戸時代に本作の模写が繰り返されていたことがわかる。

これらの縮図や模本を通じて、原本で失われた詞書を一部補うことができる。先行研究を通じて、各段の主題については概ね明らかにされており、以下に各場面と一紙ごとの内容を整理して「表」として一覧した。ただし、縮図にも詞書がなく、合致する説話や縁起文が見出されていない冒頭の第一話については、これまで主題不明とされてきた。そこで本稿では、画面内容の分析を通じてその解釈を試みる。

一 フリーア本の主題と制作年代

「表」に示したように、詞書を有する第二～四話にはその冒頭に

〔表〕 フリーア美術館蔵「地藏菩薩靈驗記」の主題・現状・復元案

第三話	第二話	第一話	
近真が陵 王の椀の 事	縁の人に かわりて 苦を受け 給う事	地藏講結 縁の人に かわりて 苦を受け 給う事	主題不明
有	有	有	欠
⑮ 詞 ⑯ 絵…春日社境内。 ⑰ 絵…肥後国の僧範頭と束帯姿で顕現した春日大明神、社殿の階に立つ地藏菩薩。	※ ⑭ 絵…立山で女の亡者の訴えを聞く、修験者の延好、地獄で身代わりとなつて責め苦を受ける地藏。	⑩ 絵…閻魔王庁。 ⑨ 絵…閻魔王庁。 ⑧ 絵…山道の情景、川と紅葉。 ⑦ 絵…道端で喧嘩をする賤女たち。 ⑥ 絵…館を出ようとすする狩衣姿の二人の男性、裏門の外にも束帯姿の二人の男性。 ⑤ 絵…殿上の間で僉議する公卿たち、弓場殿。 ④ 絵…屋内の男女、女房。 ③ 絵…前栽と縁。 ② 絵…中門と前栽、門から姿を現す隨身。 ① 絵…牛車から降りる束帯姿の貴人。	現状の紙継ぎと画面内容
※第一八紙（詞）と第一九紙（詞）の間に、元来一段分の絵が	※法念寺蔵「地藏縁起絵巻」によつて後半部分の詞と絵を補うことができる。		復元案

第六話	第五話	第四話	
地藏、農夫にかわりて疵をこうむりたる事	福智院の地藏の事	狛行高が強盗の難をのがるる事	
欠（探幽縮図及び東博本「地藏仏感応靈驗記」第四段に有）	欠（探幽縮図に有）	有	
③③ 絵…胸に矢のささった地藏菩薩、地藏堂の建立。 ③② 絵…傷を受けた男の代わりに田に水を引く小法師が、敵対する男に矢で射られるが、忽然と姿を消す。	③① 絵…農夫たちの水争いで傷を受けた男と、夢枕の地藏菩薩。 ③② 絵…傷を受けた男の代わりに田に水を引く小法師が、敵対する男に矢で射られるが、忽然と姿を消す。	②① 詞…合奏する楽人たち。 ②② 絵…椀を手にして陵王を舞う近真。 ②③ 詞…	①⑧ 詞… ①⑨ 詞…
		※第三〇紙の絵は、本来、第四話（第二七紙の詞）に対応する。	あつたと推定

「何々の事」として箇条書きで題名が記されている。第五・六話において、縮図や模本から復元できる詞書に同様の形式で題名が記されている。絵巻の詞書としては珍しいが、先行する説話集や縁起文の影響と見られる⁷⁾。

地藏菩薩による救済を説く仏典として代表的なものに、『大乘大集地藏十輪經』、『地藏菩薩本願經』、『占察善惡業報經』があり、「地藏三經」とも称される。なかでも、唐の玄奘(六〇二〜六六四)が漢訳した『大乘大集地藏十輪經』では、地藏が無仏世界の衆生救済を仏からゆだねられた存在であること、比丘の姿(声聞形)で現世に現れること、冥界では閻魔王や獄卒の姿をとって衆生救済にあたる⁸⁾ことが説かれており、救済者としての地藏菩薩の姿に具体的なイメージを与えた。

一方、『地藏菩薩本願經』では、地藏像を供養すれば富み栄え、長寿を得、水火災が除かれるとあり、現世利益が強調されている。さらに、地藏信仰を考える上で見落としてはならないもう一つの側面が道教との習合である。唐末五代(十世紀前半)の頃、道教において死後の裁きを司る十王への信仰が高まると、仏教の側でも『預修十王生七經』が偽撰され、平安時代の日本ではその影響を受けた『地藏菩薩發心因縁十王經』が成立する。後者では、地藏菩薩が十王の一人である閻魔王と同体の尊格であると説かれている。道教と仏教の習合を通じて、死後の裁きを有利に導き、地獄に堕ちた場合でも身を挺して救済にあたってくれる地藏への信仰は民衆の間にも

広まった。その結果、地藏による墮地獄救済、救難、救命に関する多様な説話が成立し、宋代に常謹によって説話集『地藏菩薩應驗記』が編まれると、日本へも大きな影響を与えた。

平安後期の日本では、浄土信仰の流行に伴い地藏菩薩による六道救済への期待が高まった。『往生要集』欣求浄土の章でも『地藏十輪經』が引用され、地藏による衆生救済が説かれている。十二世紀に編纂された『今昔物語集』には、源信と同時代の比叡山横川で活躍した仁康が地藏像を供養し地藏講を行い、結縁した人々が疫病を免れたという逸話(巻第十七第十話)など、横川ゆかりの地藏利生譚が数多く収載されている。三十話を超える地藏説話において、主人公の多くは地方の神官や武士、名もなき庶民であり、地藏と民衆の信仰との結びつきの強さを物語っている。

以降、中世を通じて数多くの説話集や縁起文が編まれ絵巻も数多く制作された。ただし、これまでに知られている説話集や絵巻において、主題不明の第一話だけでなく、第二〜六話についてもこれらがまとまって採録されているものはなく、フリーア本制作に際しては複数の説話や縁起が参照され集成されたもの⁹⁾のようである。以下では、第二話から第六話の¹⁰⁾出典について確認しておく。

第二話「地藏講結縁の人にかわりて苦を受け給う事」については『今昔物語集』巻第十七(第二十七話)「墮越中立山地獄女、蒙地藏助話」に同様の説話を見ることができる。詞書は『今昔物語集』所収説話の文言と概ね一致するものの、一部詞書特有の要素もある。

この点については、本稿第三章で後述する。

第三話「近真が陵王の桴の事」については、同じ話が延慶元年（一三〇九）頃に成立した「春日権現験記絵」巻七第三段と四段（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）にも見られ、遡って、興福寺の舞人である伯近真が天福元年（一一三三）に撰述した楽書『教訓抄』に同様の記事があることから、両絵巻はこれを共通の典拠としている可能性がある⁸。第四話「伯行高が強盜の難をのがる事」という霊験譚についても、この『教訓抄』において言及されている。楽人であった行高がある夜強盜に襲われたが、枕元の笛で太刀に応じたところ難を逃れた。実は、日ごろ信仰していた地藏菩薩が笛に添えて錫杖で太刀をかわしてくれたのだという霊験譚である。ここでは、特定の地域や実在する笛の伝承に関わって語り継がれた説話が採られており、制作環境を考える手がかりとなる。

第五話は詞書を欠くものの、該当場面の詞書と絵が京都国立博物館本「探幽縮図」に含まれていることから、「福智院の地藏の事」との題目と本文の内容が判明する。ただし、この詞書について直接の典拠となる説話や縁起文は見出されていない。福智院は、天平八年（七三六）に玄昉が平城京に開いた清水寺の跡を、建長六年（一一五四）に興福寺大乘院の実信が地藏堂として再興したことに始まる。現存する本尊地藏菩薩立像の像内には、建仁三年（一一〇三）と建長六年の年記が墨書されており、前者が造像銘、後者が福智院地藏堂での供養銘であると考えられている¹⁰。福智院は、中世を通じて

て、春日大社、法隆寺、矢田寺などとともに、南都における地藏霊験地の一つとして広く信仰を集めた。特定の寺社や地域に結びついた地藏縁起が多数成立するのも、中世日本における地藏信仰の特徴と言え、「矢田地蔵縁起絵巻」（京都・矢田寺蔵）や壬生寺蔵「壬生地蔵縁起絵巻」（京都・壬生寺蔵）など、寺社縁起と結びついた絵巻も多数制作されている。本作第五話も福智院の霊験譚として広く知られていたものであったと思われる。

第六話も詞書を欠くが、これも冒頭に触れたように、フリーア美術館本「探幽縮図」や、東京国立博物館本「地藏仏感応縁起」第四段を通じて、「地藏、農夫にかわりて疵をこうむりたる事」との題目と詞書本文を復元することができる。水の権利を争って散々に殴られた筑紫国の農夫に代わって、地藏菩薩が田に水を引き、対抗する相手からの矢をも身代わりとなって受けたという霊験譚である。

こうして見てくると、第三―五話に春日社や興福寺に関連する地藏信仰が集成されている点に特徴があり、本作の制作に南都周辺の寺社が関与した可能性も早くから指摘されてきた¹¹。しかしながら、第二話の立山や第六話の筑紫など、全体として説話の舞台は全国に広がっており、必ずしも南都のみが強調されているわけではない。一方、制作年代の目安としては、第五話の舞台となった福智院地藏堂の創建とのかかわりが重要である。先述したように、現存する福智院本尊の地藏堂への安置が建長六年であると考えられることから、少なくとも第五話の話型の成立についてこの時期を上限と見なすこ

とができる。さらに、本作第三話と同じ主題を採録している「春日権現験記絵」巻七第三段が、フリーア本からの強い影響下で成立したとする意見もあり、その場合、隆兼の活動時期である十三世紀末から十四世紀初頭をフリーア本成立の下限と見做すこととなる。

絵画様式から制作年代を考える際、フリーア本の画面には絵具の剥落や補筆も多く見受けられることから検討に困難が伴う。ただし、柔らかな描線、一部に吹き抜き屋台も駆使した複雑な建築描写、文様の細かな描き分けなどに、十二世紀絵巻の余風をうかがうことが可能である。場面転換に用いられる樹木の枝ぶりや葉の形、空間構成などには、「伴大納言絵巻」(十二世紀後半、出光美術館蔵)から「吉備大臣入唐絵巻」(十二世紀末～十三世紀初頭、ボストン美術館蔵)へ、そして「春日権現験記絵」へと続く宮廷絵師の画風との共通点を見出し得る。ただし、本作における描線はやや伸びやかさに欠け、人物の姿態や表情にも硬さが否めない。十二世紀絵巻の図様や描法を墨守しながらも、技術的な完成度はいま一步それらに及んでおらず、このような点を本作の特徴と位置づけることができる。十三世紀絵巻の最も中庸的な作風でもあり、同様の特徴は、後白河上皇周辺で制作された原本に基づく十三世紀初頭の写しと見られる「粉河寺縁起絵巻」(和歌山・粉河寺蔵)や、十三世紀後半にかけての作例と見られる「前九年合戦絵巻」(国立歴史民俗博物館・五島美術館蔵)、「前九年合戦絵巻」(東京国立博物館蔵)、「北野天神縁起絵巻」(メトロポリタン美術館蔵)などに広く見出すことができる。

フリーア美術館所蔵「地藏菩薩靈験記」第一話の主題

これらの中に制作年代の基準となる年記作例はなく、制作年代を絞り込む決め手には欠けるものの、先に触れた福智院地藏堂創建時期である建長六年を上限と捉え、十三世紀後半の制作と位置付けておきたい。

二 第一話の画面内容

以下では、これまで主題不明であるとされてきた第一話について画面内容からの解釈を試みる。

第一話には全部で十紙が貼り継がれている。各々の紙に描かれた内容は先に「表」に略述したが、詳細は下記のとおり。紙継と絵の関係を確認すると、第一紙と第二紙の間の絵は連続しておらず、本来はこの間に詞書か、別の絵があつたはずである。また、第二～六紙、第七紙～一〇紙が各々紙継ぎをまたいで一連の情景として描かれている。つまり、第一紙、第二紙、第七紙の前には本来詞書があつた可能性が高い。これを整理すると、第一話は、下記のように【A】【B】【C】三つの場面で構成されていたものと思われる。

【A】

第一紙(絵)…貴族邸の表門に到着した牛車から降りる束帯姿の貴人。(図1)



図2 中門と前栽、門から姿を現す隨身



図1 牛車から降りる束帯姿の貴人



図6 館を出ようとする狩衣姿の二人の男性、裏門の外にも束帯姿の二人の男性

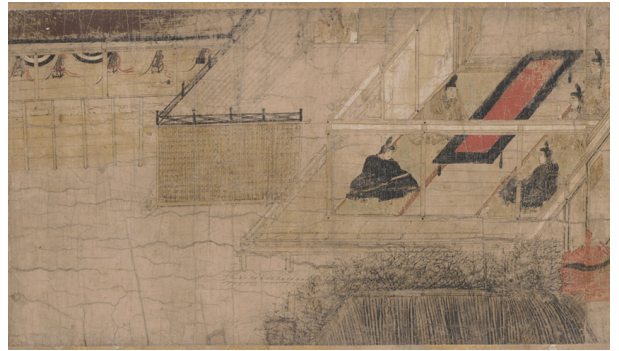


図5 殿上の中で僉議する公卿たち、弓場殿



図9 閻魔王庁



図4 屋内の男女、女房



図3 前栽と縁



図8 山道の情景、三途の川と紅葉



図7 道端で喧嘩をする五人の賤女たち

図1～9 Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F1907.375a

【B】

第二紙（絵）…中門と前栽、門から姿を現す隨身。（図2）

第三紙（絵）…前栽と縁。（図3）

第四紙（絵）…屋内の男女、女房。（図4）

第五紙（絵）…殿上の間で僉議する公卿たち、弓場殿。（図5）

第六紙（絵）…館を出ようとする狩衣姿の二人の男性、裏門の外にも束帯姿の二人の男性。（図6）

【C】

第七紙（絵）…道端で喧嘩をする五人の賤女たち。（図7）

第八紙（絵）…山道の情景、三途の川と紅葉。（図8）

第九・一〇紙（絵）…閻魔王庁。（図9）

このように整理すると【A】については手がかりとなるモチーフが限られており、その主題を検討することが難しい。一方【B】と【C】では、いずれも男女をめぐる不穏な雰囲気や漂う場面構成に特徴がある。各々見ておこう。

【B】 第四紙（図4）に描かれた邸宅の中央には、寝室で共寝する男女が描かれている。画面向かって右手の部屋には、壁の穴から寝室を覗こうとする女性が描かれている。他に類例のない、非常に珍しい場面である。

覗き見をする女性が着ている蜘蛛の巣模様の袷に、染織史の分野

から注目した吉村佳子は、その象徴的意味を「この文様の服飾を着けた人物が得体のしれない不気味な人物ということをも、絵巻を見るものに暗示する役割を担っている」と解釈している¹³。吉村はこれに先立つ論考で、中世の服飾における蜘蛛の巣文様の典拠の一つとして、衣通姫（衣通郎姫）による「我が夫子が来べき夕なりささがねの蜘蛛の行ひ是夕著しも」という歌に注目している¹⁴。

『日本書紀』（巻第十三、允恭天皇紀）では、天皇からの強い入内の要求に応える決心をした衣通姫が、しかしながら先に后となっていた姉の忍坂大中姫に憚って、天皇の訪れを待ちつつ上記の歌を詠んだと記す。「ささがねの」とは、ここでは蜘蛛にかかる枕詞として用いられているが、笹蟹、細蟹とも書き蜘蛛の異名でもあった。

和歌における蜘蛛の巣は、待つ女のイメージとともに読み継がれ、『古今和歌集』（巻第一五、恋歌五）にも、「今しはと侘びにし物をささがにの衣に掛りわれを頼むる」など、男性を待つ心情を、蜘蛛と衣通姫、そして蜘蛛の巣文様の衣装との連想から詠んだ歌がある。

そのような前提でこの場面を見ると、中央の寝室で睦みあう男女を、蜘蛛の巣文様の袷を羽織った別の女性が嫉妬あるいは悲嘆の心情で覗き見しているものと解釈できるのではないだろうか。衣通姫の物語になぞらえるならば、男性を待つ状況、さらには姉妹で一人の男性を恋うという状況が、蜘蛛の巣文様から呼び起されるのである。さらに、寝室向かって左側に目を転じると、画中の女性たちの中でひとときわ贅沢な衣装をまとった別の女性が、右手で顔を覆って悲嘆

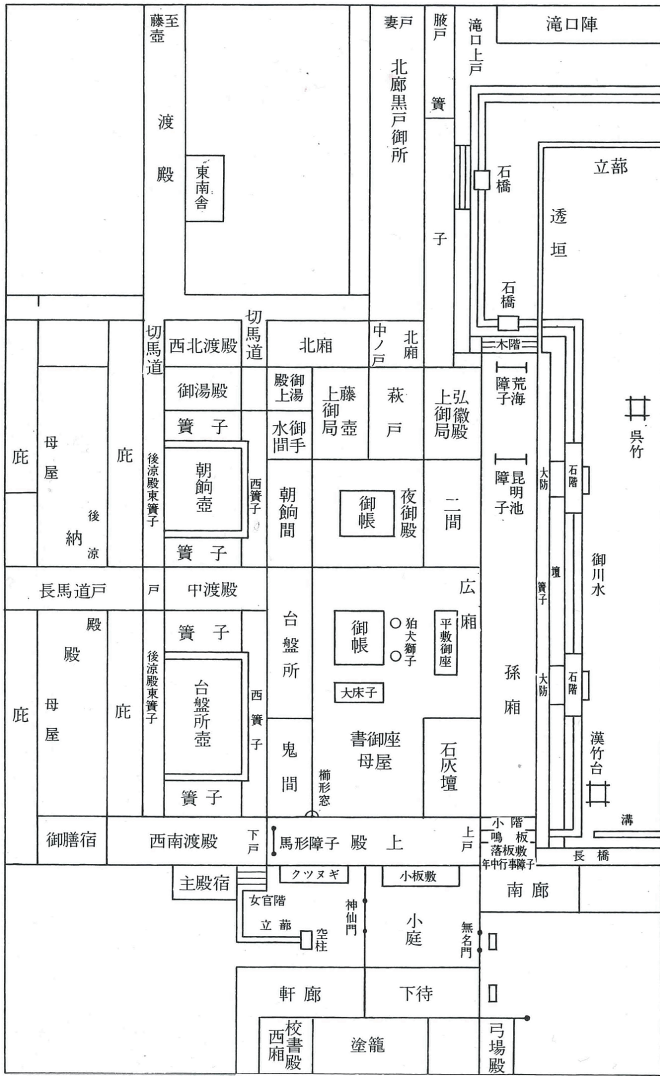


図10 清涼殿平面図（河緒実英編『有職故実図鑑』東京堂出版、1961年より転載）

に暮れている。残念ながら、剥落のため、着衣の文様までは読み取れないものの、ここでは背後に置かれている琵琶に注目したい。一方、寢室の男女の前には琴が置かれている。やや飛躍するかもしれないが、『源氏物語』橋姫帖において、宇治の八の宮の姉妹のうち姉の大君は琵琶を、妹の中君は琴を、それぞれ父宮から習っていたことが思い起こされる。この姉妹は、父亡きあと薫をめぐって不可思議な三角関係となり、その渦中で大君は逝去、中君も結局は薫と

結ばれずに匂宮の妻となる。フリーア本第一段に描かれた、琵琶と琴を各々表徴とする二人の女性の姿からは、大君の死を内包した物語の、決して幸せではない恋の結末が想起される。ここに描かれた仲睦まじい男女の憩う寢室の周辺には、『日本書紀』と『源氏物語』、二つの物語が奏でる副旋律が重なり合っている。端的に言えば、これは女性の嫉妬や恋をめぐる悲哀を絵画化した場面として理解できるのである。さらに主題を絞り込むならば、天皇の寵愛をめぐる嫉妬や悲嘆が主題となっているのではないだろうか。そのことの証左として、第四紙に描かれた空間が、天皇の住まう清涼殿（図10）として描かれていることを、いくつかのモチーフから明らかにしておく。

まず、第三紙に描かれた橙色の実のなる樹木は、内裏の庭に植えられる「右近の橘」を意図したものではないだろうか。他の場面には描かれない特徴的なモチーフである。また、第四紙に描かれた建築内部空間のうち、

睦みあう男女のいる場所を天皇の居室である萩戸と見なせば、覗き見する女性のいる場所を弘徽殿上御局、琵琶を背景に悲嘆に暮れる女性のいる場所を藤壺上御局と、各々皇妃が使用する部屋と解釈することができよう。また、女房達の座っている場所が、清涼殿の中心をなす昼御座を含む身舎部であるとすれば、続く第五紙(図5)は、公卿達が控える殿上の間と見なされる。画中に描かれた長方形の机は、殿上に設置された台盤が意図されたものであろう。さらに第六紙(図6)へと続く弓場殿も清涼殿の構造に一致する。ただし、第五紙に描かれた思案顔の公卿達や、第六紙で中庭に佇む二人の男性の役割については不明である。以上、この場面を完全に理解するにはさらなる検討が必要ではあるものの、まずは画面右半分の主題について「天皇の寵愛をめぐる、嫉妬や悲嘆」を描いたものとの見方を示しておきたい。

続く【C】は比較的単純な画面構成である。第七紙(図7)には道端で激しい取っ組み合いの喧嘩をする五人の賤女が描かれ、通りがかりの人々が、これを取り巻いている。やじ馬によって情景にリアリティが付与されるという同様の手法を、「伴大納言絵巻」子供のかんか場面に見ることができる。このような点に、後白河院政期絵巻から継承された作画技法の片鱗を見て取ることができよう。なお、第八〜一〇紙にかけて、喧嘩場面の直後に三途の川と閻魔王庁の場面が続いており、全体として【C】の場面は、心貧しい諍い女が地獄へ落ちるといふ説話として理解できる。

墮地獄につながる業因を、女性士士の喧嘩場面で描く例として、當麻寺奥の院蔵「十界図屏風」がある。右隻第六扇に、六道輪廻中の人道の一部として、小袖を奪い合う女たちの醜態が描かれている。その意味するところは、貪欲や吝嗇、そして諍いの咎であろう。フリーア本の第一段【C】にも同様の意味が込められているものと思われる。

三 女性の罪業と地蔵の救済

女性が陥りやすい罪業を、嫉妬や貪欲、諍いで代表させる考え方は、仏典中に数多く見られる。

一例をあげると、六道輪廻を説く經典として中世日本でも広く知られていた『正法念処經』餓鬼品に、以下の經文を見出すことができる。

墮於針口餓鬼之中。由其積習多造惡業。是故婦人多生餓鬼道中。何以故。女人貪欲。妬嫉多故。不及丈夫。女人小心輕心。不及丈夫。以是因緣。生餓鬼中。〔大正藏一七、九三a〕

ここでは、「針口餓鬼」という餓鬼になってしまふ因果を、「多くの悪業を造って積もり積もってしまいがちな女性が多くこの餓鬼に転生してしまう。なぜかという点、女人は貪欲で妬嫉が多いからである。丈夫(男性)に及ばない。女人は心が小さくて軽い。丈夫に及ばないのである。この因縁のために、餓鬼の中に生まれるのである」

と解説している。

また、唐の道世が著した仏教説話集『法苑珠林』欲障部第三にも以下の内容がある。

又智度論云。菩薩觀種種不淨。於諸衰中女衰最重。刀火雷電霹靂怨家。毒蛇之屬猶可暫近。女人慳妬瞋諂妖穢。鬪諍貪嫉不可

親近。何以故。女子小人心淺智薄。〔大正藏五三、八二六b〕

ここでは、やはり六道を説く經典として広く知られていた『大智度論』を引いて、種々の不淨を觀想した菩薩が觀得した真理として、「諸々の衰の中で女衰が最も重い。刀火、雷電、霹靂、怨家。毒蛇の類の方がまだ近づきやすい。女人は物惜しみし、嫉妬深く、おこりつぽく、へつらい、あやしく、穢れている。鬪諍し、貪欲で、嫉妬深く、親しく近づくべきではない。なぜかという、女子はおろかで、心が浅く知恵が薄いからである」として、女性が抱く嫉妬をはじめとする感情が、不淨の極致であると説いているのである。

仏典やそこから派生した説話においては、女性の抱える典型的な罪障としての「嫉妬・慳貪・諍い」が繰り返し解き明かされていた。これらの経説を通じて、中世日本においても、同様の女性観は広く浸透していたものと考えられる。

以上のように、「地蔵菩薩靈驗記絵」の第一話に集積された主題の一部が、嫉妬と諍いの凶像として理解できるであれば、これらの場面は、女性に自らの罪業を自覚させる女人教化の役割を担っていたと言える。自覚を促した上で、女性として生まれた以上必ず墮ち

るはずの地蔵から救済してくれる地蔵菩薩への信仰を喚起するとう、女人教化・女人救済の構造が浮かび上がってくる。

フリーア本では、続く第二話に立山地獄での女人救済説話が盛り込まれている点にも注目したい。先述したように、詞書には『今昔物語集』所収説話と一部異なる独自の内容が見られ、このことが本作制作背景にも深くかわると考えられるからである。

フリーア本詞書も『今昔物語集』所収説話も、修験者である延好が、立山にて地獄に落ちた女と出会うという設定は共通している。また、生前は京の七条西の洞院に住んでいたという女が、自分は若くして没した後に地獄へ落ちたが、生前に祇陀林寺の地蔵講に二度ほど聴聞したとうわずかばかりの善根によって地蔵の救いを受けているので、父母にさらなる追善供養を勧めたいと延好に告げる点も、細部の表現に異同はあるものの、ほぼ同じ内容を両者に見ることができ。

一方、詞書特有の内容としては、夜昼三度の苦しみのうち、「火に焼かれる責め苦」と「劍の山を登りくだる責め苦」は二度の聴聞の果報として地蔵菩薩が身代わりになってくれていたが、残りの「鬼に三六四回鞭打たれる」という責め苦だけは逃れることができないと記す点が挙げられる。『今昔物語集』所収説話では、「日夜三時二我が苦二代り給フ」として、⁽¹⁵⁾責め苦の具体的内容は省略したうえで、全ての責め苦を地蔵が身代わりになるとのみ記している。絵巻では、責め苦の内容が具体的であること、そして三つのうちの二



図11 立山地獄 Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F1907.375a

つからは逃れられていないとして、さらなる追善供養の必要性を合理的に説明している点に特徴がある。画面でも、炎と剣の山の責め苦は地藏が身代わりとなつて、鬼による鞭打ちだけ女が自ら受けている(図11)。

さらに、詞書の後半部分で、女が延好にことづけた追善供養の方法として「生きたりし時、朝夕向ひて顔をつくろひし鏡ありき、いま、我弟のもとに侍り、それを捧げて、地藏菩薩を供養して、この苦を助け給へと父母に告げてたまへ」という内容が記されている。このような具体的な供養方法も、『今昔物語集』所収説話には見られない。毎日化粧に使用していた鏡を追善供養の施物に使用するという設定が、女性の虚飾への戒めにもつながる内容であり、本作の詞書

では、『今昔物語集』所収説話より一步踏み込んで女人教化の要素が強化されているのである。

おわりに

本稿では、第一話に登場する女性が着用する桂に描かれた蜘蛛の巣模様を手がかりに、その主題を検討し、経説との関わりを明らかにした。その結果、ここに女性の罪障としての「嫉妬と諍い」の含意が認められることが浮かび上がってきた。さらに第二話における詞書の特徴も踏まえると、フリーア本の第一話から第二話にかけては、女性による地藏菩薩信仰を涵養するための説話が集成されていると言え、この絵巻自体が、女性の信仰を導くことを目的として制作されたものと見ることも可能であろう。本作の絵画様式が、正系の宮廷絵師の関与をうかがわせるものであることを先に触れた。このようなことも考え合わせると、本作の制作背景として、高貴な女性の発願や鑑賞を視野に入れることも今後の重要な課題となる。

注

- (1) *The Miraculous Interventions of Jizo Bosatsu*, collection No. F1907.375a
- (2) 秋山光夫「作品解説」『世界美術全集』(別巻四、平凡社、一九三二年)。
- (3) 矢代幸雄「フリーア画廊の地藏縁起」(『美術研究』七六、一九三八年)。
- (4) 梅津次郎「フリーア画廊の地藏験記絵と探幽縮図」(『大和文華』一三三、一九五三年)。

(5) 模本については、梅津次郎「帝室博物館蔵地蔵縁起絵巻考」、同「公刊帝室博物館蔵地蔵縁起絵巻詞書」(『美術研究』一三二、一九四三年)、小松茂美「地蔵菩薩靈驗記」諸本の展開」(『続日本絵巻大成』一二、中央公論社、一九八四年)参照。

(6) 錯簡や欠失箇所への復元については、前掲注(5)論文に加え、梅津次郎「法然寺蔵地蔵縁起絵巻に就いて」(『美術研究』一四三、一九四七年)、千野香織「地蔵菩薩靈驗記絵巻(作品解説)」(『在外日本の至宝』二、毎日新聞社、一九八〇年)参照。

(7) 宮次男「地蔵靈驗記絵について」(『仏教芸術』九七、一九七四年)。

(8) 眞鍋廣濟・梅津次郎編「地蔵靈驗記絵詞集」(『古典文庫』一八、一九五七年)、梅津次郎「地蔵菩薩絵巻解説」(『新修日本絵巻物全集』二九、角川書店、一九八〇年)。

(9) 猪瀬千尋「絵巻が語るものと楽器が語ること―フリーア本「地蔵菩薩靈驗記絵」第四段をめぐる」(『文化創造の図像学』アジア遊学一五四、二〇一二年)。

(10) 水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』七(中央公論美術出版、二〇〇九年)。

(11) 矢代前掲注(3)。
(12) 昼間範子「絵巻物の画面効果―フリーア・ギャラリー所蔵「地蔵菩薩靈驗記絵巻」第三、第四段をめぐる」(『和光大学人文学部紀要』三三、一九九八年)。

(13) 吉村佳子「フリーア美術館蔵「地蔵菩薩靈驗記絵」についての一考察―蜘蛛の巣文様の服飾を中心に」(『服飾美学』四三、二〇〇六年)。

(14) 吉村佳子「蜘蛛の巣文様の展開―中世における」(『服飾美学』四一、二〇〇五年)、また蜘蛛の巣の料紙装飾について、四辻秀紀「伝後円融天皇宸筆「新撰朗詠集抄」の料紙装飾について」(『MUSEUM』四三六、一九八七年)参照。

(15) 『新日本古典文学大系 今昔物語集』四(岩波書店、一九九四年)。

フリーア美術館所蔵「地蔵菩薩靈驗記」第一話の主題

(付記)

一 本論文は、「JSPS課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業グローバル展開(グローバル人文学・日本文学・芸術・思想の普遍性の探求) 絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」(代表者・阿部泰郎、二〇一六年～二〇一九年)の一環として、二〇一九年三月十八～十九日に、米国フリーア美術館にて実施したワークショップ「フリーア美術館所蔵作品を通じた日本絵ものがたり文化遺産の発見」における作品調査と口頭発表の成果である。

二 仏典の引用は「大正新脩大藏經」(出典を大正藏、卷、頁、段(a・b・c)と表記)に基づき、通行の字体に改めた。また経文の探索に際しては、大藏経テキストデータベース研究会(SAT)作成「大藏経テキストデータベース」を活用した。